

データでみる軽トラ市

(その27)

愛知大学 三遠南信地域連携研究センター長 戸田敏行
地域政策学部教授

「軽トラ市+輪島朝市」の試行

1. 岐阜軽トラ市+出張輪島朝市

軽トラ市が被災した輪島朝市の復興を支援する「輪島朝市復興軽トラ市」については、これまでもお伝えしてきた通りである。このような輪島朝市復興は、軽トラ市が社会変革を生み出す軽トラ市3.0（因みに個別軽トラ市の活動が軽トラ市1.0、軽トラ市相互ネットワークによる従来活動が2.0）の試金石の一つではないかと思える。

さて、その新たな一歩として「岐阜軽トラ市+出張輪島朝市 in 岐阜柳ヶ瀬」が4月26日（土）・27日（日）に岐阜市柳ヶ瀬商店街で開催された。今回はその内容を紹介したい。図1が配置である。岐阜軽トラ市24台、地元キッチンカー10台、出張輪島朝市10店である。

この取り組みの企画・運営は、岐阜県下呂軽トラ市の実行委員長船坂誠司氏（本稿その22：2024年7月号掲載）である。当初は「高橋尚子杯ぎふ清流ハーフマラソン」に連動した軽トラ市を構想するが、そこから新聞社や岐阜県、岐阜市、商工会議所などを巻き込みながら柳ヶ瀬商店街での開催、そして輪島朝市との連携となった。

筆者が感じた注目点は、①岐阜市柳ヶ瀬商



図1 柳ヶ瀬商店街での配置図

店街という広域拠点商店街への軽トラ市の応用、②個別軽トラ市の集合形態である岐阜県軽トラ市連合会としての活動、③出張輪島朝市との継続的連携の3点である。通常の定期軽トラ市ではないが、軽トラ市の新たな試行である。上記の注目点に沿って紹介したい。

2. 広域拠点商店街への軽トラ市の応用

会場となる柳ヶ瀬商店街は、県都岐阜市を代表する商店街である。明治30年頃のスタートであり、昭和の全盛期には美川憲一の「柳ヶ瀬ブルース」で全国に知られた。こうした広域拠点商店街も、郊外的大型商業モールに



図2 アーケード内での軽トラ市の準備



図3 並ぶ飲食軽トラ市

客を奪われ、2024年の岐阜高島屋撤退ではマチの核を欠いた感もある。一方、女性客をターゲットにしたマルシェやビル・リノベーション、シャッター商店街との揶揄を逆手に取った廃墟ツアーなどの試みが続々となされる。日本一若い理事長と言われる水野琢朗氏にもお会いしたが、軽トラ市からも新たな視点を創ろうとする姿勢は魅力的だ。

今回の軽トラ市を通じて、筆者は次の3点を感じた。①徹底した社会実験：柳ヶ瀬商店街は、300m×300mの四角形の広さの中に歴史的な集積がある。これを活かすには、狙いを変えながら刺激を与える小さな店舗集積を動かしてみることだろう。これには可動商店街である軽トラ市の特性が活きる。②対話の復活：軽トラ市が対話で成り立っていることはこれまでも紹介してきたところであるが、対面販売の魅力を商店街に戻してゆくことだろう。③朝市の魅力：今回の軽トラ市でも地場の野菜などの販売があったが、歩いて来ることが出来る生活者への魅力である。広域拠点商店街であっても近隣住民の居住環境に繋がることが重要だ。今回の軽トラ市には、岐阜市長さんはじめ自治体関係者も多く来られ

ていたが、まちづくりとして発展することを期待したい。

3. 岐阜県軽トラ市連合会としての活動

軽トラ市の全国団体は軽団連であるが、複数の軽トラ市が連携する形態として県のまとまりを作る例である。これまでも県商工会連合会が代表となって個別商工会での軽トラ市を実施する例はあったが、県単位の軽トラ市連合会の活動例は見当たらない。

岐阜県軽トラ市連合会は、中津川加子母軽トラ市、恵那串原軽トラ市、下呂軽トラ市の3軽トラ市で構成されている。今回の岐阜軽トラ市は岐阜県軽トラ市連合から11台が参加している。ほかに、同県の可児市と美濃加茂市で活動している可美マルシェから14台が加わっている。いずれも軽自動車での出店であり、軽トラ市と包括できるであろう。岐阜県の地図を見れば、その広さに気づくが、現在の連合会の軽トラ市は岐阜市から遠い。そこで比較的岐阜市に近い可美マルシェが加わったわけである。共通事業があることで連合形態は強められるが、同時に参加母体を増やすことも重要であろう。柳ヶ瀬商店街から見れば、広域的な地域資源が集積することになり出

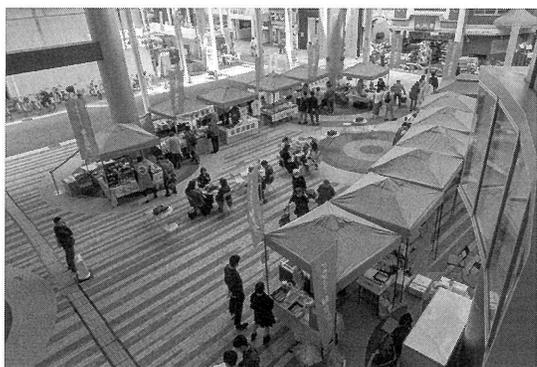


図4 オレンジで統一された出張輪島朝市



図5 富水組会長（左）、柴橋岐阜市長（前列左から4人目）とゼミ学生

店の魅力となった。

4. 出張輪島朝市との継続的連携

次に、出張輪島朝市との継続的な連携である。輪島との関係は、2024年9月に愛大とスズキの共同研究として実施した「モデル軽トラ市 in 輪島」を輪島高校で開催した際に、下呂軽トラ市から参加いただいたことが出発点である。その後、下呂軽トラ市で能登半島復興支援販売を行い、寄付金を輪島高校に贈っている。

こうしたことを背景に、出張輪島朝市を軽トラ市と連動して行うことに決め、資金をクラウドファンディングで集めている。岐阜県軽トラ市連合会がオーナーとなり、合計200万円を超えるものとなった。このクラウドファンディングによって、今回の出張輪島朝市が成り立っており、11月にも継続開催が計画されている。

私のゼミで柳ヶ瀬での出張輪島朝市調査を行ったので、少し結果を示しておきたい。調査は4月26日（土）の一日であるが、来場者が2,272名である。約100名にインタビューを行ったが、出張輪島朝市を目的に来訪した方が約6割、現地の輪島朝市に行ったことがあ

る方が4割、今回の出張輪島朝市を経験して輪島朝市に強く行きたいと思う方が6割となっている。来場者、購入者は明らかに輪島への共感を持っており、これは旅行などを通して復興に寄与するものとなるだろう。出張輪島朝市は、これまでの輪島朝市にない地域外販売という形態だが、朝市の対面、人と人との関係性を介してより深い共感が構築される。このメカニズムは軽トラ市と同じである。

5. 輪島での全国軽トラ市に向けて

最後に、「軽トラ市＋輪島朝市」の次の展開である。輪島現地での朝市復興と出張輪島朝市が連動することが有効であり、そこに軽トラ市が何らかの支援を行えないかということ、昨年から進めてきた。

同じ方向性を持って、観光庁の「能登半島地震からの復興に向けた観光再生支援事業」に、輪島市朝市組会から申請した事業が採択されることになった。その一部が、「復興輪島朝市×全国軽トラ市 in 輪島」であり、本年8月31日に開催する。事業内容については続報としたい。